



G・H・ミードの社会理論におけるホワイトヘッド自然哲学

——パースペクティブの客観性をめぐって——

一 序

G・H・ミードの社会理論は、概念的曖昧さと「非体系的で断片的な性格」を指摘されてきた。確かに、ミード自身は「体系化」を意図した著作を残しておらず、また、残された講義ノートや草稿類から死後編纂された著作には明確な家義づけを伴う叙述は記されていない。とはいえ、果たして「非体系性」なるものはミードの理論に本質的なことなのだろうか。

これまでのミードへの言及は、そのほとんどが主著とされる『精神・自己・社会』に、そして役割取得、社会化、自己といったトピックに偏ってきた。しかもそれら

安 川 一

は、対立し合うことさえしばしばの諸論脈——構造・対・過程、社会決定論・対・非決定論、實在論・対・名目論、システム論・対・反システム論、等々——において、それぞれを正当化するものとして語られてきた。その結果、近年のミード再評価の動向の中に、様々な「ミード」が浮かび上がり、個々に正統を主張する諸々の学徒が登場してきている。⁽¹⁾

けれども、ここに見られる種々のアプローチは、その対象においても手法においても狭小なものと言わざるを得ないだろう。役割取得、一般化された他者、自己、「I」と「me」といった諸概念——社会学の規定種目となりつつも、常に先のごとき批判にみまわれ、その含意

を未だ十分に開花しているとは言い難いそれら——が、そもそも、『精神・自己・社会』のみに依拠して単独で論じ尽くすことのできるものではないからである。むしろ、それぞれの含意を詳らかにしつつ、さらなる展開を意図するのであれば、これらの概念は、これまであまり顧みられることになかった他の「諸断片」——主に『行為の哲学』や『現在の哲学』に語られている、行為、時間、パースペクティヴ、創発(emergence)、社会性(sociality)といった諸概念に結び付けて考察されるべきだろう。個々の概念、例えば「自己」は、それ自体確かに研究者を魅了するものであるかもしれない。しかし、ここでは特に、「曖昧で非体系的」だと言う批判が、結局はこのような囚縛からもたらされているということに注意しておきたい。ミードの社会理論に内在する、一貫性を持った哲学的体系が見出されねばならない。

こうした「体系性」の開示に向かう糸口として、本稿では「パースペクティヴの客観的实在」という視角が検討される(SW 307⁽²⁾)。客観的相対主義と呼ばれる立場である。ミードは絶対的観念論を批判した。すなわち、絶対自我を唯一絶対の实在とみなし、すべての個別的パ-

スペクティヴをその諸局面もしくは歪曲物にすぎないものとする見地を批判した。また、ミードは機械論的自然観を批判した。すなわち、質料と運動の世界を絶対の宇宙と見なし、精神をその反映もしくは部分的表象とする見地を批判した。彼は論じる。「単一のパースペクティヴとしてのあらゆるパースペクティヴは、舞台裏に潜む絶対者に準拠するのではなく、あるパースペクティヴから別のパースペクティヴへと相互に依拠し合っている」(PA 119)。「世界」は、個体ごとに異なる、また事態の推移に応じて異なる世界であり、实在する世界とはこうした個々の「世界」——パースペクティヴの組織体である(MT 413)。そして、科学的営為は何よりこのことに依拠しなければならぬ。ミードはそう述べる。

こうした着想は、一つに、ミードが生きた時代を映じているかもしれない。すなわち、産業化・都市化の急速な進展と移民労働者の大量流入、そしてこれに伴うありとあらゆる社会問題の噴出。社会関係全般の変質や、集団間・諸個人間の対立・葛藤の深化、さらには諸国家間の利害対立と紛争。ミードはこれらを目撃した。そして、様々な社会運動に関わる中で、実践的に、理論的に問題

解決を図ろうとした。それは、複雑に多様化し、様々な亀裂を生じつつあった人間間の諸交流を、相互に関連づけ、ある有機的全体へまとめ上げようとする理論的試みであったと言ふこともできるだろう。⁽⁴⁾

またそこには、「人間、質料、空間、時間に関する近代物理学者の科学的見解との劇的な一致」を指摘することもできるだろう。⁽⁵⁾『行為の哲学』と『現在の哲学』の多くの部分が相対論的自然科学の世界観の叙述にあてられているように、ミードの晩年の思索は主として相対論との対話に彩られていたと言ふことができる。彼自身が、パースペクティブの客観的実在という視角に至る二つの動向として、一方に精神性を行為内に位置づけようとするデュレイ流の機能主義心理学を、他方にホワイトヘッドの相対主義的自然哲学を指摘しているように(SW 30⁽⁶⁾)、相対論的な自然哲学は彼の立場の一つの柱となっていたものと考えられるのである。

それでは、この「パースペクティブの客観的実在」とは何を意味するのか。ミードの叙述に現れるホワイトヘッドの自然哲学を拠所として考察していききたい。⁽⁷⁾

二 ホワイトヘッドの自然哲学

ミードの議論の主たる焦点は精神・物質の二元論の克服にあったと言える (PA 357 ff.; SW 267 ff., 306 ff.)。

それは、一方でニュートン流の機械論的自然観が、他方でバークリー流の主観的観念論が、一致して「心」の中に封じ込めてしまったもの——色や音といった感覚特性、あるいはイメージ——を、「自然においてそこにある」と論じることを意図していた。またそれは、心もしくは精神を、唯我論へと至る形而上学的領域から救い出し、「自然」の中に位置づけることを意図していた (SW 306)。

ミードは、これらを可能にする方策として、個体と環境の相互規定(依存)関係に注目する。個体は環境によってその活動を規定されるが、環境は個体の諸活動なくしては「環境」たり得ない。ミードは前者を因果的規定、後者を論理的(構成的)規定と呼んだ (PA 115 ff.)。

「一般的に言って、我々は一方で環境による有機体の規定を因果的なものとして考察し、他方で有機体による環境の規定を選択的なもの、そしてその限りで構成的なものとして考察している。すなわち、我々の有機

体活動に関連してなされる一群の刺激の選択によって、物的事物からこれこれの諸要素が切り出され、ある種の構造(論理的構造)がある対象として構成される——そのように考察している」(PA 412; cf. PA 115)。ベースペクティヴはこのような相互的規定によって与えられる (PA 116)。すなわち、「ベースペクティヴとは、個体との関連における世界であり、世界との関連における個体である」(PA 115)。出来事の推移一般の中に相互規定関係に基づく有機体「それ自体の永続的時間」(ベースペクティヴ)が分化し (SW 307)、これが当の有機体の活動を導いている。この意味で、それは「客観的に」存在している。「自然に関する諸々のベースペクティヴは自然の中に存在し、素材としての有機体の意識にあるのではなし」(SW 272)⁽⁸⁾。

ホワイトヘッドは、このような自然認識の客観的相対性の論脈において、すなわち「自然は諸々のベースペクティヴからなる組織体であり、これらは自然においてそこにある」という着想において論及される (SW 307)。ミードは「一致集合 (consentient set)」の概念に注目する。推移する全出来事としての自然は、それ自体が

この自然における反復的パターンであるとこの個体有機体(「知覚しつつある出来事 (perceptient event)」)の「今・ここ」との関連(「共軛 (coherence)」)において、この有機体を焦点とする一致集合へと構造化される。すなわち、「当の個体との関連において『ここ』と見なされるであろうすべての対象」を含むベースペクティヴが形成される (SW 272)。かくして、認識され経験される自然とは、相互に関連し合う諸々のベースペクティヴへと成層化された多元的世界であり、この多元的世界こそ科学が知る自然であると言う (SW 308)。

ミードの意図は、こうした着想を展開して、諸個体が諸々の関係性において経験する個別的世界の考察へと適用することにあつた (SW 275)。社会的な行為と経験の文脈における行為コントロールの問題である。だが、こうした問題の検討に入る前に、ひとまずはホワイトヘッドの自然哲学をその諸概念を中心に概観しておこう。⁽⁹⁾

ホワイトヘッドの自然哲学とは、自然科学を人間の自然経験から導かれる客観的知識として成立させようとする試みであつた。それは、自然の二元分裂論の下で絶対の時空との関連で語られる科学的物質論、すなわち「あ

る瞬間における自然」を究極の事実と見なす自然観に対して異議を申し立て、これに代えて、絶えず生起する出来事を議論の出発点に据えるよう主張する (PNK 1: 2, 2: 4; CN Chap. 1 & 2)。

「自然の究極的事実なるものは、時空関係によって互いに関連した諸出来事であり、そしてそれらの関係は大体において他の諸出来事を部分として含みうる（あるいは、超えて延長しうる）諸出来事特性へ還元される」 (PNK 1: 5)。

相互に包絡し合うそれぞれにユニークな出来事が次々に継起する。ホワイトヘッドによれば、自然について指摘しうる唯一の一般的事実とは、「何ものかが推移しつづあるということ、定義を必要とする生起 (occurrence) が存在するということ」 (CN 57)、すなわち「自然の推移 (Passage)」である。

そして、それゆえ一つの出来事は、ある瞬間・ある点において単独で生起するというよりは、これと同時に起こっている、そしてこれを超えて延長している諸々の出来事の複合体と共に生起する。これが、「自然全体としてのより完全な出来事」——「持続 (duration)」である

(PNK 16: 1)。それは「抽象的な意味での時間の伸長ではない」 (PNK 16: 1)。それは、「感覚意識に開示された本来的要因である同時性によって限定されている自然の具体的厚板」である (CN 65)。持続とは、「今・現在」という条件によって限定されたすべての出来事の複合体として、時間的厚みを持って経験に現れる自然の実質なのである。

こうして、自然は出来事の複合体として論じられる⁽¹⁰⁾。我々が直接に知覚する自然は、それ自体の個別性において識別される一つの出来事だろう。しかもそれは、諸々の相互関係性を通じて他の出来事を種々の関係項として含み込み、開示するものであろう（「意味づけ (significance)」——後述）。そして、その際に知覚は、固有の場所表示を含んでいる。「今・ここ」に限定された出来事が、それと同時に起こる全体的持続から区別されているのである (CN 85)。

「自然認識なるものは自然の内からの認識であり、『自然内』の『ここ』かつ『自然内のいま』の認識であるとともに、自然の一要素（すなわち、知覚しつづある出来事）の残りの自然に対する関係の意識であるというこ

とである。認識されるものもまた単に事物ではなく、諸事物の関係であるが、抽象的な意味の関係ではなく、とくに、関係づけられたものとしてのこうした事物である」(PNK 3: 6)。

この「この出来事」、すなわち、「意識の作用にとっての焦点となるところの自然における出来事であり、他の出来事はそれとの関連において知覚される」そのような出来事をホワイトヘッドは「知覚しつつある出来事」と呼んだ(CN 121)。それは心ではない。それは、「自然において、それをもとにして心が知覚するところのものである」(CN 121)。それは「われわれの感覺的現在に含まれた出来事であり、それをわれわれはある特殊な仕方、われわれの知覚の観点であるとして区別するのである。哲学的に言うならば、知覚しつつある出来事とは、現在の持続に含まれているわれわれの身体的活動である」(CN 213)。

そしてホワイトヘッドは、「ここ」という表現に込められた、知覚しつつある出来事と持続とのこのような特殊な関係を「共軛」と呼んだ(CN 123; PNK 16: 4, 16: 5)。

「知覚しつつある出来事は、連合された現在の持続において、つねに、ここに今存在している。それは、その持続に絶対的な位置をしめているもの、とよばれるものであるかもしれない。したがって、一つの定まった持続は、一定の知覚しつつある出来事と連合されているのであり、その結果、有限の出来事が持続に対してもちうる特殊な関係をわれわれは意識するのである。この関係は『共軛』とよばれる」(CN 214)。

自然の推移に、観察の焦点となる特定の出来事との特殊な関係、すなわち共軛の関係にある持続が定位される。

例えば、それは運動の準照たる静止を表している。また、一群の出来事を識別すべく特定の意味づけをされた「対象」を表現しているよう(PR 26—27)。それは、知覚の準拠枠となるべく、共軛関係をもとに整序される諸々の出来事なのである。これがミードの注目する「一致集合」である。それは、自然を知覚する際の準照——「推移に對比される空間的構造の同一性」もしくは「ある種の出来事に関する時間的次元の推移に伴う秩序変化の対照」である(PA 333^(H))。

このようにして、全般的推移たる自然は、個々の知覚

しつつかある出来事と共軛関係にある諸々の時空系、すなわち諸々の一致集合へと成層化される。ホワイトヘッドは言う。「一つの出来事は唯一の持続と共軛されうる。

……しかし、持続はそれと共軛な多くの出来事をもつことができる」(PNK 16:5)。同一の持続について、様々な一致集合が複相的に構成される。「自然の成層化」である (CN 213, 221)。それゆえ、自然は二元分裂論に語られる絶対的時空ではない。自然それ自体は様々な出来事の推移であり、知覚され認識されて初めて出現する相対的・多元的な諸成層なのである。そして、とりわけ重要なことに、知覚しつつかある出来事とのこのように特殊な関係はいわゆる「主観性」を意味しない。

「出来事の意味づけは一層複雑である。第一に、それらは互いに意味づけあっている。出来事の一様な意味づけは、こうして、出来事の一様な時空的構造となってくる。……われわれの意識は、また、見かけ上の現在をつうじて完全な自然である持続へと一様に成層化されるものとして、この構造を開示してくれる。こうした成層化は有限の意識に対する事実の受け入れをあらわしているが、その場合こうした成層化は真に自然

の性格なのであり、意識の幻覚ではない」(PR 27)。

かくして、ホワイトヘッドは、相互に関連し合うパースペクティブからなる多元論的自然を描き出す。ある出来事と共軛なパースペクティブは、ある完全なるパターンの歪曲でも独立的物理的実体からの選択でもなく、相互に関連し合って「自然においてそこにある」(SW 307)。それだけではない。成層化された諸々のパースペクティブこそは、「そこにある自然の唯一の形態」なのである (SW 315)。

三 行為と時間——パースペクティブの組織化

こうして、「精密物理学が携わる世界や運動の空時的構造は、知覚しつつかある出来事や有機体との関係においてのみ自然において存在するということが明らかにになった」(SW 315)。ミードは、このような複相的世界観を展開して二元論的立場の克服へと論を進めようとする。さらに、個体の個別的経験と社会的世界との関係を語ろうとする。

「共同体の個々の成員は」同じ共同体の他のどの成員のものとも多少なりとも異なる世界を持っており、彼

は、全員に共通する共同体生活の諸々の出来事を他のどの個体のそれとも異なった角度から切り取っている。ホワイトヘッド流に言えば、各々の個体は共同生活を異なった仕方でも成層化しており、共同体の生活とはこうした成層すべての総体である。そして、こうした成層はすべて自然において存在している」(SW 276)。

ここに、ホワイトヘッドの着想のミード的展開を見て取ることが出来る。「我々は、パースペクティヴの組織化の例を社会と社会的経験に見出す。少なくとも私にとっては、このことこそホワイトヘッド教授の哲学で最も曖昧な相である」(SW 315)。

けれども、ミードはホワイトヘッドを無批判に受容したわけではない。デュイ流の機能主義心理学と発想を同じくするミードは、行為という文脈において、とりわけ問題解決的行為との関連で、パースペクティヴを語る。そこでは特に、新奇な (novel) 出来事との絶えざる遭遇が強調され、これを起因とする行為構成が問題にされるのである。

ホワイトヘッドの相對論的自然哲学は、自然科学的思想の基本的概念——時間と空間——を、覚識 (awareness)

(S) を通じて持続との間に成立している諸関係からの、思考による抽象化の産物として呈示した。持続には、知覚しつつある出来事との個々の共軌的諸関係に依じて「多くの時空の抽象化が可能であり、それぞれに自然に対して特殊な関係を持っている」(PNK 78)。「絶対位置は自由に定義され」、「代替の時間系の存在」が可能である (CN 119)。例えば「瞬時」は、具体的な感覚経験においては決して出会うことのない一種の理想的極限概念であり、「時間的延長をまったくもたない全自然という理想、すなわち、一瞬における全自然という理想」であるにすぎないのだ (CN 71)。ここでホワイトヘッドは、所与である持続から瞬時平面・瞬時直線・瞬時点といった論理的抽象要素の導出を試みる。彼のいわゆる「延長抽象化の技法 (the method of extensive abstraction)」である (CN 71-75; PNK part III)。その詳細な議論は省略するが、ここでは、これに関連して「対象」論に注目しておこう。ホワイトヘッドによれば、「対象」とは「自然における推移しない要素」である (CN 161)。推移する出来事群自体は認知不可能である。出来事は、それぞれにユニークで他と異なっているがゆえに、「認

知」に本質的な同一性の意識を拒絶する。では、自然の認知はいかにしてなされるのか。それは、「出来事の性格を構成する要素」である対象の認識によるのだと言う(CN 162)。すなわち、現実的・具体的・連続的・特殊な出来事の位置に、可能的・抽象的・原子的・普遍的な対象を認識することによって、出来事が弁別される。

ホワイトヘッドはこれを、「対象の出来事への進入」と呼んだ(CN 162-3)。進入(ingression)とは、認知における「出来事と対象との一般的関係」の発現である(CN 162)。

「青の感覚意識は、……その青、その観察者の有する知覚しつつある出来事、その状況、および、その介在的出来事、の間に存在する関係の感覚意識として表現されるのである。一定の時間的出来事だけが、それらの性質が一定の明白な種類のものであることを要求するのであるが、全体的自然なるものが実際には要求されるのである。自然の出来事へのその青の進入は、このようにして、体系的に相互に関係づけられたものとして表される」(CN 171-2)。

けれども、こうした「進入」は、自然には存在しない、

その意味で形而上学的な「永遠的对象」の先験的設定を意味し(PA 139)、かかる対象を論理的実体とする「延長抽象化」は「抽象化の誤用」である(PP 20)——ミードはそのようにホワイトヘッドを批判する(cf. PA 525)。そして、抽象化は、それがなされる現実的状况をめぐる知的コントロールの道具としてこそ用いられるべきだと言う(PP 21)。もっとも、「延長抽象化」の着想自体は、精密科学に関するミードの叙述とは親和であろう。科学的営為においては、見掛け上の現在は時間を抽象され、推移とは無関係に反復する存続的因子が探究される。「推移の世界」の中に「瞬時の世界」が求められるのである(PA 174E)。ミードは論じる。

「科学の技法は、存続的パターンを正確なものにしようとしている。また、限定可能な境界を持つ極小推移を見出して要求に適う程度に時間的厚みを除こうとしている。このような技法の理想的極限は、瞬時の世界における質料もしくはエネルギー粒子の配置である」(PA 176)。

しかし、ミードは科学的技法それ自体を問題にしたわけではない。問題は、実際の行為場面における存続的因子

への要請であり、その発現のメカニズムであった。

ミードは、「世界には諸々の変化が進行中であり、これらの帰結として世界は異なる世界になる」と論じた (PP 4)。瞬時的な現在は退けられる。現在とは時間的厚みを持った「見掛け上の現在」であり、「実際に経験される推移とは、ある見掛け上の現在と他のそれとの重なり合いである」(SW 346)。このような着想自体はホワイトヘッドのそれに合致するだろう。しかし、ミードにすれば、ホワイトヘッドの描く世界には創発的出来事の出現する余地がない (PP 43, 49)。それは「時空の固定的秩序」を構築せんとする試みであり (PP 10)、ある種の「形而上学的領域」(「永遠的对象」の天国)へと限り無く接近していくように思われる (PP 43)。ホワイトヘッドが「自然の創造的前進」を語り、また「創発」に言及していることは事実である。しかし、それでもミードは、永遠的对象の天国は様々な過去の「存在」可能性を「主観的なもの」として葬り去る形而上学的世界であると断じた。自らの問いに回答を見出すことはできなかったのである (PP 10, 42D)。

我々はここに、パースペクティブ概念のミード的含意

を見て取ることができるだろう。ミードは、「経験には連続性があり、それは諸々の現在の連続性である」と論じた (SW 346)。「一つの経験が他の経験で置き換えられるだけなら、経験は推移の経験とはならないだろう」とも述べられた (SW 349)。問題は「経験される」推移、「経験される」連続性であり、秩序づけられた時空における出来事の平滑な推移そのものは問われないのである。しかも、「むきだしの連続性をそのまま経験することはできない」(SW 350; cf. PA 179)。ホワイトヘッドは、同様の認識に立って「永遠の対象の出来事への進入」を語った。しかしミードは、「連続性の内部に裂け目が生じなければ、連続性は経験不能だろう」と言う (SW 350)。経験には常に何らかの裂け目 (Break) が生じ、そうして初めて経験の連続性が問題視——経験される。「裂け目が連続性を暴き出し、その一方で連続性が新奇性の背景となっている」のである (SW 350)。

それゆえ、例えば「過去」は、過ぎ去った諸々の出来事そのものの内にあるのではない。過去は、新奇な出来事との遭遇と共に現れる、現在から溢れ出た、現在にのつての「経験される」過去なのである (SW 345—6; PP

2)。

「過去は出来事の諸条件という形でなされる不変の要素の記述であるが、それは直接的な問題の見地からなされている。過去はもはや解き広げられた巻物ではない。それは合理化のために現在が要請する現在の内縁であり、創発のたびに交容するものであろう」(1964: 554—5)。

我々は、遭遇した新奇な出来事の説明を求めて、「進行之つづあるものを後方に向けて拡大し、一歩一歩の歩みが行為の目的に連続するように」図る(SW 247)。過去は、中断された連続性を回復するよう、「そこにあったに違いない」変更不能な条件として構成される、「創発的出来事とこれを条件づける世界との間に現れる諸関係」なのである(SW 354; cf. PP 23)。

また、未来そのものは「救い難く偶発的な」ものである(PA 353)。しかしそれは、行為に位置づけられた時に過去同様の仮説的構成体となる(PP 12; SW 351)。すなわち未来は、現在の諸々の動作に介在してこれらの方角づける、「我々の前に広がる動作の見取り図」なのである(SW 351)。経験に生じた「裂け目」を修復すべ

く、我々は——「過去」にならって言うならば——「進行之つづあるものを前方に向けて拡大する」のだ(cf. PA 347—8)。

かくして、「人間の経験に生じるのは我々が認識する過去と未来だけ」である(SW 351)。過去と未来は、新奇な出来事との遭遇と共に構成され、問題の出現とその解決を条件づけるものとして現在にある。この意味で、「リアリティは現在にある」(PP 1)。我々は、現在において新奇な出来事に出会う(現在は「創発の座である」という点で特異)である——1964: 554; cf. PP 23)。この遭遇はあらかじめ知り得るものではないが、遭遇した後の当の出来事は、過去によって条件づけられ未来によって導かれていくものとして、連続性の中に埋め込まれる。諸々の出来事に一定の関係性が定位されるのである。そして、このように新奇な出来事との遭遇を起点に構成された関係性としての過去(そして未来)とは、何よりパースペクティブであると言うことができよう(PA 99)。

それらは、経験される連続性の回復、すなわち絶えざる問題解決の営みとしての行為構成を含んでいる。「行為に中断が生じない限り、停留的内容も停留的经验も存

在しないであろう」——ミードはそう論じた (PA 335)。新奇な出来事との遭遇は、行為構成の準照として、当の個体の「ここ・今」に依拠した状況の構造化を図る契機となる。「未来の行為の成否は、自然の構造と過程の両者において存続するものを行為の見取り図として発現させることのいかんにかかっている」 (PA 170)。構造化された存続的時空として「瞬時の世界」が構築され、もって絶えざる問題解決の進行が図られるのである。この意味で、「パースペクティヴとは、変化しながら自らを維持していく構造体が自然に対して持つ連続的關係である」 (PA 118)。

ミードの論じる「行為」とは、「持続を通貫して延長し、生起する出来事への適応を通じて未来へと融合していく」ことよって自己維持的に進行する、統合的全体としての「過程」である (PA 345)。それは、「現在起こりつつある出来事の確固たる条件を規定するものとして過去を含み、また、きたるべき出来事すなわち未来への適応を通じてそれ自体を維持するものとして、現在起こりつつある出来事を含んでいる」 (PA 343-4)。そしてこの中に、パースペクティヴは、ホワイトヘッドが論

じる時間の相対性を、行為構成の無限の可能性として表象する。それゆえ、パースペクティヴは空時的なアナロジーにも、またホワイトヘッドの言及する認知的関係にもとどまらない。それは時間の相対性を含み、そのことよって行為のコントロールを準備しているのである。「いかなる有機体も——この語をホワイトヘッド流に最広義で用いるならば——諸々の関係によって、すなわち、後方にも前方にも拡大されて世界を構成している諸関係によって、自らを維持している」のだ (SW 354)。そして、それゆえ次のような言明が理解されよう。

「社会的行為のメカニズムに現れる精神とは、パースペクティヴの組織化であり、少なくとも自然の創造的前進の一つの相である」 (SW 316)。

「心に対して閉包的な自然」を追求したホワイトヘッドとは異なり、明らかにこうした言明に意を留めながら、ミードは「精神に対して閉包的である自然など存在しない」と断じた (SW 310)。精神性は行為の再構成過程において機能的に理解され、この意味で精神の自然内への回復が図られる。行為の可能性として一括りにされた過去と未来からなる空時的構成体としてのパースペクティ

ヴ——そこにはある出来事と他の諸々の出来事との可能的同時性が定位される——、そしてそれらの組織体としての自然が、行為コントロールの内、人々の内省的営みに結び付けられるのである。

かくして、時空は、新奇な出来事との遭遇を契機とする問題解決的行為の過程に、パースペクティヴとして経験される。それゆえ、人々の営みの中で次々姿を遂げていく。では、その「客観的実在」とはいかにして語られるのか。

四 パースペクティヴの客観性と社会性

前述したように、認知される自然は様々な出来事の「関係性」に他ならない。そして、こうした関係性を体現するパースペクティヴこそ、このような認知される自然のあるがままの姿である。ホワイトヘッドは、「いわゆる事物の特性なるものは、常に、未指定の他の事物との関係性として表現され得る」と論じた (PNK 3:5)。出来事は、直接に知覚され個別的特異性をもって弁別される「識別されるもの」と、これとの関連においてその関係項としてのみ認知される「識別しうるもの」とに区

別される。「識別しうるもの」は認知において汲み尽くされうるものではない。それは「その感覚意識に開示される全自然であり、……その感覚意識において現実に弁別されている自然のあらゆるものを超えて延長し、また含んでいる」(CN 58)。しかし、それは「識別されるもの」の認知の内に関係項として包括され、その認知を成立させている。つまり「識別されるものに対するその関係によって、識別しうるものが開示」されるのである (CN 60)。「意味づけ」である。従って、識別される対象とは諸々の関係性の束であり、認知とはこの関係性の識別である。そして、知覚しつつある出来事そのものもまた、これら関係づけられた出来事の一部であり、「連合された持続の部分」にすぎない (CN 12)。それゆえこれは、パースペクティヴ内部に定位される。ミードはこのことを次のように論じている。

「パースペクティヴは有機体のここ・そこ、今・その時によって規定されてはいるけれども、このここ・そこ、今・その時は、時空における、共軌集合を規定する準拠点の一つにすぎないし、また当の有機体も、知覚においてはこのパースペクティヴの内部にある。も

ちろん、パースペクティヴを有機体の内部に位置づけることなどはかけている」(PA 110-111)。

個々のパースペクティヴに表象される「関係性」が同一である限り、その内に含まれる、「行為の見取り図」である仮説的構成体としての諸対象も同一である。そして、それらは反復的に一定の行為を帰結させるといふ意味で「客観的」にそこにある。この時、その一つ一つは、ある知覚しつつかある出来事の「今のここでの立場」から抽象された、ある一瞬・ある一点における普遍世界であらう。しかし、このことは唯我論には連ならない。限定的な接近可能性それ自体は「主観性」を意味していないのである。

「当該個体に属するものは彼の世界に属するものと同じ一の客観的実在性を持っている。それはあるがままにそこにある。彼に属するものは大部分が彼にしか接近できないが、その一方で彼の世界は彼の社会的パースペクティヴの中に存在する他者達にも接近可能である。この事実彼の有機体的諸経験を主観的なものにはしない。それらが主観的なものとなるのは、彼の行為を規定しようとする際に、それらが未だ獲得されていない

い実在性の代用物となる時だけである」(PA 115; cf. PA 258)。

つまり、主観性を特徴づけるのは、そこから導かれる行為の成否なのである。「リアリティは行為の成就を待ち受けている」(SW 317)。主観的なパースペクティヴは行為を成就させない。個体は食物を手にし得ず、危険を避け得ない。既製的手段が適用不能である未知の事態に對して、個体が独自に用意する「行為の見取り図」——行為の成就を保証し得ないそれが主観的なのである。パースペクティヴそれ自体は、むしろ主観・客観の区別が生じる場なのだ(PA 114)。そして、問題は社会的場におけるこのような区別である。

ホワイトヘッドは、「一つの出来事は唯一の持続と共軛されうる。……しかし、持続はそれと共軛な多数の出来事をもつことができる」と論じた(PNK 16: 5)。「あるパースペクティヴに属する諸々の出来事は、他のすべてのパースペクティヴの中にも位置づけられる。しかし、位置づけられるパースペクティヴが異なれば異なった論理関係を持っている」(PA 183)。その結果、相対的・多元的世界が現れる。自然が有機体を受け入れる限りで、

それは諸々のパースペクティヴへと成層化される。ただし、この時の知覚しつつかある出来事は一種受動的な傍観者である。それは、「当該パースペクティヴに含まれている諸個体の動作に影響されることもなく、諸々のパースペクティヴを凝視もしくは注視しているにすぎない」(Miller 1973: 213)。しかしミードは、行為の過程でこれらのパースペクティヴが再構成されていくことに注目した。そしてこの行為は社会的なもの——社会過程であった。動物は、いかにそれが人間社会に比類しうる程の複雑な社会を営もうとも、生理学的メカニズムに支配され、個々に閉包的で孤立的なパースペクティヴに潜んでいる。けれども、社会的な動作の流れに棲む人間は、社会的行為のメカニズムと普遍的言語を得て、コミュニケーションを営み、内省的経験を営む。そして、これらの営みの中で「様々なパースペクティヴの中に自らを位置づけることができ」(PA 182)、「他者達の見地から自身自身のパースペクティヴを考察することができる」(PA 202)。複数の個体からなる社会的営みの中で、人は、行為のより確実で合理的な達成を目指し、一つのパースペクティヴから別のパースペクティヴへと転移するのであ

る。それは「人間個体のユニークな特性」であると言う(PA 152)。ここでは、「個々のパースペクティヴは、相互に分離していたり独立であったりはしない」のだ(PA 140)。

パースペクティヴのこのような社会性は、一方で社会科学的考察を誘導し、他方で社会そのものを基礎づけている。すなわち、社会現象が考察の対象になるのは「それらが諸個体の経験に入り込む限り」であり、社会が成立するのは諸個体が「他者のパースペクティヴにおいて、そしてとりわけ集団のパースペクティヴにおいて行為する限り」においてである(SW 309—10)。さらにそれは、社会過程と内省的行為の進展において一層重要である。

「複数のパースペクティヴが相互に交差して、もって一方のパースペクティヴの秩序に属するものが別のパースペクティヴの秩序に属するものに影響を与えているとするならば、そこには二つの条件がなければならぬように思われる。諸々のパースペクティヴは共通のパースペクティヴに属していなければならず、この共通のパースペクティヴの知覚しつつかある出来事は、自らを、交差するパースペクティヴの個々に位置づけ

ることができねばならない」(PA 184)。

そこには一定の時間的厚みをもって推移する社会過程がある。この過程の進展に応じて、諸個人の個別的行為について停留的であるような、共同体全体の選択による一致集合が現れる。共通のバースペクティヴである。

「個体は、共通の営みの中で確かに自分自身を直接に他者の位置に置いている。そして、物事を他者がするように空時的に意味づけて観察している。このような共通の経験に応じて、彼らの前には共通の世界が、集団の世界が現れる」(SW 341)。

ミードは、「社会とはホワイトヘッドが定義した意味における有機体であり、そこにはそうした社会有機体との関連において存在するところの共通の自然というものがある」と論じた(SW 340)。共有された世界の中で、諸個体は自らの行為世界を築き上げ、個々の行為を協働的な行為の流れに流し込む。個々のバースペクティヴに与えられる可能的未来の実在性が、この中で共同体的な裏付けを得て、行為の達成可能性を「一定」保証されるのである。

それゆえ、バースペクティヴの「客観性」は、絶対者

のバースペクティヴや永遠の法則から与えられるものではない。それは、実際の行為の過程で初めて確認され、その共同体的歴史的蓄積——共通バースペクティヴとの一致によってもたらされるのである。

「バースペクティヴの客観性を支えるのは、個体有機体のバースペクティヴと全体的行為のパターンとのこのような一致——個体有機体のバースペクティヴを包含し、その結果全体的行為の内部でのこの有機体の行為を可能にする、そのような全体的行為のパターンとの一致である」(SW 318)。

では、この共通バースペクティヴはいかにして保証されるのか。諸々の個別バースペクティヴはいかにして組織化されるのか。——ミードが見るところ、ホワイトヘッドの論理にこうした問題への回答を見出すことはできない⁽¹⁵⁾。別の論理構成がなされねばならない。

五 中間考察——結びに代えて

ホワイトヘッドからミードへ——ここまでの考察から、次のような共通の着想とその展開とを見て取ることができよう。自然の二元分裂の修復が図られ、このこととの

関連において、絶対的・静態的ではない、複相的・動態的な世界観の展開が意図されているということ。個々の世界は、諸々の関係性を通じて出来事の推移全体の一部を開示しているにすぎない。しかしそれは、新奇な出来事との遭遇を契機としてある一瞬・ある一点において抽象・再構成された、その限りでの普遍世界であるということ。この再構成は時間の相対性を含み、このことが世界の相対性を、また行為過程・社会過程のコントロールを可能にしているということ。そして、とりわけ社会科学にとって重要なことは、個々の世界は相互に転移し合ひ、またより大きな共通世界をそれぞれに内包している、この共通世界へと展開可能であるということ。

ホワイトヘッドの共軛集合が出来事のバースのある一瞬・ある一点における時空の抽象であるならば、ミードのバースペクティヴは（社会的）行為の過程における作業仮説の絶えざる再構成を含んでいる。ミードは、現実における新奇な出来事との遭遇を強調し、このことをもってホワイトヘッドの立場と自らのそれを分かちとうとした。とはいえ、両者の議論はミードが論じる程には違わないかもしれない。何より、ミードのホワイトヘッド

批判は断片的なものにすぎず、関連して導出された論点を彼自身が十分に議論しているわけではないからである。しかも本稿は、ミード自身のホワイトヘッドへの言及を追うことを通じてミードの議論の性格を明らかにしようとするものであり、両者の客観的な比較検討に踏み込んではいない。それゆえここでは、ミードの立論には、ホワイトヘッドに刺激されて発芽し、彼固有の論脈（問題解決的行為）において独自の展開を始めようとしていた部分が含まれているということを確認するにとどめたい。

彼自身が論じているとおり、関心の焦点は確かに「個別バースペクティヴと共通バースペクティヴとの関係」にあった（SW 312）。「あるバースペクティヴが客観的ではなくなる、こう言ってよければ主観的になる、そして、新しい共通精神と新しい共通バースペクティヴとが現れる」過程（SW 316）——遭遇した新奇な出来事と既存の共通バースペクティヴとの調整、そしてこれに連なる共通バースペクティヴの再構成が問題であった。彼が創発及び社会性という言葉で語ろうとした論点である。もっとも、それは新たな論稿を必要とするだろう。本稿では省略された「把握（Prehension）」概念に代表される

後期ホワイトヘッドの有機体の哲学との比較検討を含めて、議論のさらなる展開を図りたい。

- (1) ミードをめぐる諸議論の整理の試みとして、また本稿への導入的議論として、安川(一九八四)を参照されたい。
- (2) ミードへの言及は、論文の刊行年、及び P. M. T. P. A. SW の略号をもって示される。個々については文献リストを参照。
- (3) Morris (1934; 1964) 山田(一九八一)等を参照。また「ミード自身」ホワイトヘッドの立場を指して「客観的相対主義」と称している(PA 523)。
- (4) このような論点については安川(一九八五)に詳述されよう。
- (5) Kallen, H. M., "Introduction." In Natanson (1973), p. ix.
- (6) ミードの著作には、デューイとホワイトヘッドに共通の論理を見出そうとする記述が散見される(例えば、PA 652; SW 339—40)。また、この意図が『行為の哲学』の基本的モティーフであったと言ふこともできよう。
- (7) ミードのホワイトヘッドへの言及は、主にその自然哲学三部作と呼ばれる『自然認識の諸原理』『自然という概念』『相対性理論』に限られており、本稿での考察もこれら三つの著作に基づいてなされている。『過程と実在』に代表されるホワイトヘッドの後期哲学との比較検討は別の機会に譲りたい。なお、ミードとホワイトヘッドとの関連

を扱った文献としては、Cook (1979) Lewis & Smith (1980) 山田(一九八一)等を参照。

- (8) ミードがバースベクティヴの典型として呈示しているのは生物体と環境との関係に現れるそれである(PA 115)。そして、これを含めて三つの例を挙げている。知覚しつつある出来事と一致集合(後述)、そして人間個体と社会的環境それぞれの関係性である(PA 200—1, 606ff)。
- (9) ホワイトヘッドへの言及にも PNK・CN・PR の略号が用いられる。なお、PNK については節・項の番号を、他の著作については訳書の頁数を表記する。翻訳は松籟社版『著作集』に依拠したが、引用した訳文は訳書と一致しない部分を含んでいる。また、ホワイトヘッドの解釈については、Lowe (1962) を参考にした。
- (10) そうした自然は「それ自己充足的な、心に対して閉包的な自然である。彼は論じる。「自然科学の哲学がなすべき第一の仕事は、認識にとって一つの複合された事実と考えられる自然という概念を克明に分析し、すべての自然法則がそれによって記述されるような、基本的実質と諸実質間の基本的関係を抽出し、さらに、このようにして抽出される実質と関係が、自然のなかで現れる諸実質間のすべての関係の表現として妥当であることを確かめることである」(CN 51)。
- (11) 「一致集合」に関するこのような意義づけはミードに固有のものと思われる。ホワイトヘッド自身の定義につい

つは、PNK (7: 1-3) を参照。

(12) ミードはそれを適応 (adjustment) と呼んだ。——「適応の過程は、生の過程を維持してゐる諸々の衝動を解放するであろう諸特性を環境の中に選択することであり、さらには、衝動に表現機会が与えられたならばそこから発現するであろう行為のパターンに対応するよう」に「こうした環境の諸特性を客観的に組織することである」(PA 450)。

(13) ミードは論じてゐる。——「時間を慎重に取り扱うならば、すなわち、どの出来事をとつても他の出来事との間に無数の同時性がありうること、その結果同一の出来事群について無数の時間秩序がありうることを認識するならば、同一の出来事群は無数の異なるパースペクティヴに組織されるという理解が可能になる」(SW 309)。

(14) ホワイトヘッドにおける「有機体」の概念についても詳述すべきところであるが、ここではミードによる理解を示すにとめておこう。すなわち、「それ自体であるためには一定の期間を要する」という性質を持ち、それゆゑ空間的構造であるのみならず、時間的な構造もしくは過程である「統一的構造体」を有機体と云ふ (SW 308; cf. PA 138)。

(15) ミードは、「私が取り上げたものは、ホワイヤンマン・教授のライヴニッツに由来するものであり、それは、特定の出来事の中に他のすべての出来事が鏡映されてゐるというパースペクティヴの着想の中に現れてゐる」と言ふ (SW 308)。ここでは、パースペクティヴの社会性への指向を見

て取ることができ (cf. PP 78)。しかしミードは、ホワイヤンマンの立論には「共通世界に關しては「曖昧なエン」しか見出すことができません (SW 340)」、また「パースペクティヴ組織化の原理は永遠的対象のヒエラルキーの進入とつひか示されてゐる」として、これを批判してゐる (PA 540)。

文献

Cook, G. A. 1979 "Whitehead's Influence on the Thought of G. H. Mead." *Transaction of the C. S. Peirce Society* 15: 107-31.

Lewis, J. D. & Smith, R. L. 1980 *American Sociology and Pragmatism: Mead, Chicago Sociology, and Symbolic Interaction*. Univ. of Chicago Pr.

Lowe, V. 1962 *Understanding Whitehead*. 大出・田中訳『ホワイヤンマンの招待』松籟社 一九八二。

Mead, G. H. 1932 *The Philosophy of the Present*. Univ. of Chicago Pr. [PP]

——— 1936 *Movements of Thought in the Nineteenth Century*. Univ. of Chicago Pr. [MT]

——— 1938 *The Philosophy of the Act*. Univ. of Chicago Pr. [PA]

——— 1964 *Selected Writings*. Univ. of Chicago Pr. [SW]

——— 1964 "Two Unpublished Papers." *Review of Metaphy-*

tics 17: 511—56.

Miller, D. L. 1973 *George Herbert Mead: Self, Language, and the World*. Univ. of Chicago Pr..

Morris, C. W. 1934 "Introduction." In G. H. Mead, *Mind, Self, and Society*. Univ. of Chicago Pr..

——1964 *Signification and Significance: A Study of the Relations of Signs and Values*. M. I. T. Pr..

Natanson, M. 1973 *The Social Dynamics of George H. Mead*. Murtinus Nijhoff. 長田・川越訳『G・H・ミード

の動的社会理論』新泉社 一九八三。

Whitehead, A. N. 1919 *An Enquiry Concerning the Principles of Natural Knowledge*. 藤川 訳『ホワイトヘッド 著作集3・自然認識の諸原理』松籟社 一九八一。[PNK]

——1920 *The Concepts of Nature*. 藤川 訳『ホワイトヘッド 著作集4・自然と宇宙概念』松籟社 一九八二。[CN]

——1922 *The Principle of Relativity*. 藤川 訳『ホワイトヘッド 著作集5・相対性理論』松籟社 一九八三。[PR]

山田重樹 一九八一「G・H・ミードのロジックケーンション論」『立命館産業社会論集』二八、五七—一〇二頁。

安川 一 一九八四「G. H. Meadにおける行為とプロセスクテイヴ——self概念の再検討に向けて——」『一橋研究』九、一一九—一三五。

——一九八五「G・H・ミード社会心理学の性格と課題——社会的実践と社会心理学——」『社会学評論』掲載予定。

(一橋大学大学院博士課程)